

語りの談話に出現する名詞における不確実性

—中国人日本語学習者と日本語母語話者の比較—

俵山雄司・望月雄介

要 旨

日本語母語話者（JNS）と中国人日本語学習者（CJL）に絵に描かれたストーリーを語ってもらった談話をデータとして、ストーリーに登場する人物・事物 X を描写する際の表現の選択、具体的には、「X のような」「X かな」などの名詞 + 不確実性を伝達する表現の使用傾向について探った。その結果、解釈が自明のもの、数多くの解釈が生まれ得るものを両極として、その中間的な登場人物・事物に関しては、JNS は不確実性の表現を多く用いて表現する傾向が見られた。一方で、CJL は比較的不確実性の表現を使用せず語りを進行していた。さらに、この結果を踏まえて、日本語母語話者（JNS）と中国語母語話者（CNS）が絵に描かれたストーリーを語った別の談話データを用いて、CJL の語りの特徴が母語である中国語の影響を受けているかをみたところ、CNS は全く不確実性の表現を使用していなかった。ここから、CJL の語り特徴が母語の特徴を受けていること、また、日本語能力の向上に伴い、語りにおける不確実性の表現使用という行為を習得していることが示唆された。

キーワード

語り、不確実性、日本語母語話者、中国人日本語学習者、中国語母語話者

目 次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 日本語母語話者と日本語学習者の語りの比較

3. 1 調査資料と調査手順
3. 2 調査結果
4. 日本語母語話者と中国母語話者の語りの比較
4. 1 調査資料と調査手順
4. 2 調査結果
5. おわりに

1. はじめに

日本語母語話者が、日本語学習者が語ったストーリーを聞き、その内容は理解できたとしても、何らかの違和感を覚えるといったことがある。その原因は、母語に比べ熟達度の低い言語を話す過程での何らかの制約によるものかもしれないし、母語でのストーリーの語り方の特徴の転移という可能性もある。

本稿では、絵に描かれているストーリーに登場する人物・事物 X を描写する際の表現の選択に焦点を当て、まず、日本語母語話者と中国人日本語学習者の語りを分析する。具体的には、人物・事物 X を名詞単独の形で出して確定的に語るのか、「X のような」「X かな」などの形で人物・事物 X に対する不確実性を伝達しながら語るのかという点について見ていく。また、その結果を踏まえ、日本語母語話者と中国語母語話者の語り¹を比較し、母語の語り方の影響についても探る。

2. 先行研究

絵に描かれているストーリーを他者に説明するタスクで得られた日本語母語話者と日本語学習者の語りを分析している研究には、渡邊 (1996)、庄司 (2001)、烏 (2010)、烏 (2011)、烏 (2012)、小口 (2017)、砂川 (2017) などがある。

このうち、本稿と特に関連の深いものは烏 (2012) である。烏 (2012) は、『アンジュール ある犬の物語』という文字のない絵本の内容を他者に説明するタスクで得られた語りをデータとして、登場人物やストーリーの鍵

となる名詞の使用を分析している。

登場人物である「犬」について、日本語学習者（中国人、日本語能力試験1級合格）は、犬に「エンジェル」「ハチ公」といった名前を付けたものが20名中6名もいたのに対し、日本語母語話者は「ワンワン」「アンジュール」など20名中2名のみであった。また、学習者は飼い主について「飼い主」6名、「ご主人」3名、「主（ぬし）」3名、「主人」9名と選択の幅が広がったのに対し、母語話者は「飼い主」が10名で、「ご主人」「主人」が1名ずつと、比較的特定の名詞に集中していた。その他、興味深いのは、犬が移動中に見た光景にほんやりと描かれていた「影」について、母語話者は「影」「人影」と見たままを描写しているのに対して、学習者は「人影」以外に、3名が「恋人」と断定している点である。

このほかに、庄司（2001）でも名詞の選択についての言及がある。庄司（2001）は、日本語学習者10名（中国5名を含むアジア国籍、日本語能力試験1級受験者）と日本語母語話者10名を対象として、6コマから構成される絵2種について語ってもらい調査を実施している。ここでは母語話者5名以上に使用された語を「ストーリー・テリングのキーワード」と位置付け、この中には母語話者・非母語話者双方に同程度に選択されている語と、一方にしか選択されていない語があると述べている。後者の具体例として、母語話者の「女性」「女の人」に対して学習者の「女の子」、母語話者の「お礼を言う」に対して学習者の「ありがとうございます/ました」が挙げられている。

2つの研究に共通して見られた結果として、絵に描かれたストーリーを語る際にキーワードとなっている名詞（表現）において、母語話者と学習者の選択傾向が異なるということが挙げられる。ただ、本稿が着目した名詞単独か、「Xのような」などの形で不確実性を付加した形かという観点からの分析は行われていない。

3. 日本語母語話者と日本語学習者の語りの比較

本節では、絵（6コマ漫画）に描かれているストーリーを他者に語って

もらったものを資料として、日本語母語話者と日本語学習者の語りに現われる名詞の性質、特に不確実性に焦点を当てて分析する。

3. 1 調査資料と調査手順

調査に用いた漫画はドイツの漫画家 e.o. plauen による『Vater und Sohn』というセリフなしの6コマ漫画集のうちの1編である(稿末資料1参照)。登場人物は父親と子どもで、その他に、じゅうたん、筆、インク、鞭、子供が描いた絵に描かれた動物が登場するものである。

データ収集の手順としては、まず語り手側に、十分に漫画の内容を見てもらい、もし内容について質問があれば、事前に調査者に質問して不明な点がないようにしてもらった。この際、辞書の使用は認めなかった。その上で、目の前にいる聞き手に向かって、漫画を見ながら、その内容を一続きのストーリーとして日本語で語ってもらっている。聞き手は、この漫画の内容を知らない日本語母語話者である。

このような手順に基づき、日本語母語話者(大学生、あるいは大学院生)12名と、中国人日本語学習者(大学院生で日本語能力試験N1合格)12名を対象として調査を行った。音声はICレコーダーで録音し、文字化した。

3. 2 調査結果

ここでは、調査対象の登場人物・事物として、比較的多様な名詞が選択・使用されていた「父親」「子ども」「鞭」「子どもが描いた絵に描かれた動物(2種類)」を取り上げる。これは、その名詞が多様な解釈を許すことが、不確実性を伴う表現の出現の可能性につながると判断したからである。

まず、最初から最後までずっとストーリーに登場する「父親」と「子ども」について、どのように表現していたかをみる。以下の表1は日本語母語話者(以下、JNS)、表2は中国人日本語学習者(以下、CJL)のものである。原則的に、それぞれの話者の語りで初出の際の形式を採っている。不確実性を伴う表現(以下、不確実性の表現)には下線を付した。不確実性の表現とは、本研究で新たに設定した用語で、筆者がデータ中で「名詞

に不確実性を付与している」と判断した形式のことである²。当該形式の文法カテゴリーは様々であり、今回のデータには、フィラー（「なんか」）、副詞（「おそらく」「たぶん」）、助詞（「とか」）、接続詞（「あるいは」）、モダリティ形式（「ような」「みたいな」「かな」「と思われる」）、複合的な表現（「A か B かわからない」といった形で出現していた。

表1 父親と子どもの表現形式 (JNS)

| 話者 | 「父親」の表現形式 | 「子ども」の表現形式 |
|-------|---------------|--------------|
| JNS1 | お父さん | 男の子 |
| JNS2 | ちょっと太った中年の男性 | 小さな男の子 |
| JNS3 | おじさん | 男の子 |
| JNS4 | はげた恰幅がいいおじさん | 子ども |
| JNS5 | おじさん、あるいはお父さん | 少年 |
| JNS6 | 小太りのおっさん | 子ども |
| JNS7 | 家庭教師 | 子どもの子 |
| JNS8 | お父さん | 息子 |
| JNS9 | 大きい男の人 | 子ども ※ジャック |
| JNS10 | お父さん | 子ども |
| JNS11 | お父さん | (お父さんとその) 息子 |
| JNS12 | おじいちゃん | 孫 |

表2 父親と子どもの表現形式 (CJL)

| 話者 | 「父親」の表現形式 | 「子ども」の表現形式 |
|------|-----------|------------|
| CJL1 | 厳しいお父さん | いたずらな子ども |
| CJL2 | お父さん | 息子 |
| CJL3 | お父さん | 子ども |
| CJL4 | おじいさん | 子ども |
| CJL5 | お父さん | 息子さん |
| CJL6 | 父親 | 男の子 |
| CJL7 | お父さん | 息子 |
| CJL8 | おじいさん | 男の子 |
| CJL9 | お父さん | 息子さん |

| | | |
|-------|--------------------|-----|
| CJL10 | お父さんかおじいさんかわかんないけど | 子ども |
| CJL11 | 年をとった男性 | 男の子 |
| CJL12 | おじいさん | 孫さん |

「父親」については、両者で「お父さん」(JNS が5名、CJL が6名)という表現に集中している。不確実性の表現となっているのは、JNS5の「おじいさん、あるいはお父さん」とCJL10の「お父さんかおじいさんかわかんないけど」の各1名ずつだけであった。その他、特徴として言えるのは、JNSのうち4名が外形的な特徴に言及していることである。具体的には、「ちょっと太った中年の男性」「はげた恰幅がいいおじいさん」「小太りのおっさん」「大きい男の人」がそれにあたる。CJLには同様の表現は見られなかった。

もう1人の「子ども」については、両者に共通して「子ども」「男の子」「息子」がよく選ばれている。一方で、烏(2012)でCJLの特徴として挙げられていた登場人物への名づけは、JNSに1名のみ観察された。具体的には、「1人はなんか、まあ子どもでえっとなんかジャ、んーうち的になんか見た目的にジャックっていう名前の男の子なのね」という形で登場していた。ここでも「見た目的に」という表現で外形に着目したことが言及されていることは興味深い。

全体として、主要な登場人物2名については、不確実性の表現はほとんど伴わない形で表現がされていたと言える。

次は、最初のコマでは登場していなかった「絵に描かれた動物1」「絵に描かれた動物2」の表現について見ていく。前者は子どもが書いたもので、後者は父親が書いたものである。

表3 絵に描かれた動物1・2の表現形式 (JNS)

| 話者 | 「絵に描かれた動物1」の表現形式 | 「絵に描かれた動物2」の表現形式 |
|------|------------------|------------------|
| JNS1 | 言及なし | 言及なし |

| | | |
|-------|--|----------------------|
| JNS2 | <u>なんか不思議な動物、なんか豚のような犬のような、なにか得体の知れない絵</u> | 言及なし |
| JNS3 | 言及なし | 言及なし |
| JNS4 | 言及なし | 言及なし |
| JNS5 | <u>サルか犬かわからない、その中間のような生き物</u> | へびと <u>思われる動物</u> |
| JNS6 | サルの絵 | へび |
| JNS7 | ライオン | へび |
| JNS8 | サル | へび |
| JNS9 | サルの絵 | <u>なんかへびみたい</u> な |
| JNS10 | サルと <u>か犬のような絵</u> | 龍の絵 |
| JNS11 | <u>おそらくおサルさんの絵（です）</u> | きっとドラゴン <u>でしょうね</u> |
| JNS12 | ライオン <u>みたいな感じの絵</u> | 龍 <u>みたいな動物</u> |

表4 絵に描かれた動物1・2の表現形式 (CJL)

| 話者 | 「絵に描かれた動物1」の表現形式 | 「絵に描かれた動物2」の表現形式 |
|-------|--|--|
| CJL1 | サルの絵 | 長いへび |
| CJL2 | ライオン | 龍 |
| CJL3 | とてもかわいいライオンの絵 | 龍の模様の動物 |
| CJL4 | サルの絵 | スネークの絵 |
| CJL5 | <u>たぶんサルかなと思います</u> | へびの絵 |
| CJL6 | サルと <u>か一、なんか動物の模様</u> | 言及なし |
| CJL7 | サル | へび |
| CJL8 | サル <u>みたい</u> ように思いましたので、 | へび |
| CJL9 | 獅子 | へび |
| CJL10 | なに？サル？サルかライオン？ <u>かわからないが、ま、そういう感じのもの</u> | 言及なし |
| CJL11 | サルのような、サルのような、 <u>サルのよう</u> でサルじゃない <u>よう</u> で1つの動物 | 龍、龍かへびかわかんないドラゴンかへび <u>かわからない</u> ですけど |
| CJL12 | 動物 <u>のような絵</u> | へび <u>のような動物</u> |

「絵に描かれた動物1」については、JNSは、絵の特徴に言及せず、淡々と絵を描いたという事実を描写したものが複数見られた。例えば「その時

男の子が、そのさっきのインクを伸ばして、絵を描いていました」(JNS1)のようなものである。この場合は、後半で絵の上手さに必ず言及しており、絵の特徴よりも、その出来栄を中心に表現した結果だと思われる。このようなものを「言及なし」と処理して除外すると、絵の特徴に言及したのは12名中9名だった。その9名のうち5名が不確実性の表現を使用していた。その中には、「なんか不思議な動物、なんか豚のような犬のような、なにか得体の知れない絵」のように非常に長いものと、「サルとか犬のような絵」のように比較的短いものがある。一方、CJLは12名全員が絵の特徴に言及しており、12名中6名が不確実性の表現を用いていた。こちらも「なに？サル？サルかライオン？かわからないが、ま、そういう感じのもの」といった長いものから、「たぶんサルかなと思います」のような短いものまであった。不確実性の表現は、割合としては両者で同程度だったと言える。

「絵に描かれた動物2」については、JNSは「言及なし」が4名で、残り8名中の4名に「へびと思われる動物」などの形で、不確実性の表現が観察された。一方、CJLは「言及なし」が2名で、残り10名中の2名に不確実性の表現が見られた。

「言及なし」の場合を除外して考えてみると、「絵1」については同程度に、「絵2」についてはJNSのほうに多くの不確実性の表現が現れたと言える。

最後に、こちらも最初のコマでは登場していなかった「鞭」についての表現を比較する。「鞭」はいたずら書きをしている子どもを叱るために父親が持ち出したものである。

表5 鞭の表現形式 (JNS)

| 話者 | 「鞭」の表現形式 |
|------|------------|
| JNS1 | 言及なし |
| JNS2 | なにか棒のようなもの |

表6 鞭の表現形式 (CJL)

| 話者 | 「鞭」の表現形式 |
|------|----------|
| CJL1 | 鞭 |
| CJL2 | 棒 |

| | |
|-------|------------------------------|
| JNS3 | 鞭かな、鞭 <u>って</u> いうかその、お仕置きの棒 |
| JNS4 | 鞭 <u>みたい</u> な |
| JNS5 | 言及なし |
| JNS6 | 鞭 <u>っばい</u> の |
| JNS7 | なんか鞭 <u>みたい</u> の |
| JNS8 | 一本の鞭 |
| JNS9 | 鞭 |
| JNS10 | 鞭 |
| JNS11 | 鞭 |
| JNS12 | 鞭 |

| | |
|-------|--|
| CJL3 | 言及なし |
| CJL4 | 竹 |
| CJL5 | 鞭 |
| CJL6 | 言及なし |
| CJL7 | 鞭 |
| CJL8 | 棒 |
| CJL9 | 鞭 |
| CJL10 | 細長い、な、それ <u>なん</u> だ <u>ら</u> う？つ、杖 <u>か</u> な |
| CJL11 | 言及なし |
| CJL12 | <u>なんか</u> この細長いの、教鞭？ <u>の</u> ようなもの |

「鞭」については、JNS・CJLともに「言及なし」が2名、残り10名が何らかの言及をしていた。JNSでは5名、CJLでは2名が不確実性の表現を用いており、こちらも「絵に描かれた動物2」同様に、JNSのほうが語りにおいて不確実性を伝達する傾向があったと言える。

ここまでの結果を不確実性の付加の観点からまとめておく。「父親」「子ども」には不確実性の表現は見られなかった。これは、2人の外見的特徴や関係性から、「父親」「子ども」ということが比較的自明であり、それらを使用する動機がなかったと考えられる。「絵に描かれた動物1」は、どのような動物かを絵から判断するのは難しく、他の登場人物や事物に比べて、数多くの解釈が生まれ得るものだった。それにより両者に同程度の不確実性の表現が観察されたと考える。それに対して、「絵に描かれた動物2」「鞭」は、比較的JNSのほうに不確実性の表現が多く見られた。

以上の結果から、解釈が自明のもの、数多くの解釈が生まれ得るものを両極として、その中間的な登場人物や事物に関しては、JNSは不確実性の表現を多く用いて表現する傾向があると言えよう。一方で、CJLは比較的、不確実性の表現を使用せず語りを進行している。これは、CJLの母語である中国語の語りの特徴の反映である可能性が考えられる。

4. 日本語母語話者と中国母語話者の語りの比較

本節では、これまでの分析を踏まえ、ストーリーに登場する人物や事物に関して、日本語母語話者と中国語母語話者がどのように表現しているのかについて調査する。

4. 1 調査資料と調査手順

本調査は、ミスター・オー・コーパスの語りデータを使用する。ミスター・オー・コーパスは、異言語比較可能な談話データであり、日本語、アメリカ英語、韓国語、アラビア語、タイ語、中国語のデータが収録されている。このコーパスの会話参加者はすべて女性であり、大学教師と大学生ペア、親しい間柄の大学生ペアという上下関係・親疎関係も考慮された2種類の会話データがある。各言語において同様の方法でデータが収録されているため、同じ条件で比較ができるデータとなっている。ミスター・オー・コーパスは(1)課題達成談話、(2)語り、(3)会話の3つの談話から構成されている。

ここでは、(2)語りのデータの一部を用いる。これは、会話参加者ペアが15枚のカードを並び替え、1つのストーリーを完成させ、その後、1人ずつ、その並び替えて作ったストーリーを、全く知らない第三者に伝えるものである。

15枚のカード(稿末資料2参照)には、「丸い形の主人公」、「木の枝」、「崖」が登場しているため、本研究はこれら3つの表現形式を取り上げる。日本語母語話者と中国語母語話者のデータから、番号の若い順に12名分ずつ選び、分析を行った。

4. 2 調査結果

まず、「丸い形の主人公」について、どのように表現していたかをみる。以下の表7は、日本語母語話者(JNS)、表8は中国語母語話者(以下、CNS)が使用していた形式である。中国語の日本語訳は全て筆者(望月)によるものである。

表7 主人公の表現形式 (JNS)

| 話者 | 「主人公」の表現形式 |
|----------|--|
| J01・Nar1 | 言及なし |
| J01・Nar2 | 言及なし |
| J03・Nar1 | 主人公となるこう豆のような人間 |
| J03・Nar2 | 男の子 |
| J05・Nar1 | 丸君 |
| J05・Nar2 | 丸い人 <u>じゃないんですけど</u> 、粘土の塊 <u>みたいの</u> |
| J07・Nar1 | 人 |
| J07・Nar2 | 豆 |
| J09・Nar1 | 丸君 |
| J09・Nar2 | まるくん |
| J11・Nar1 | おまめの子供 |
| J11・Nar2 | 人 |

表8 主人公の表現形式 (CNS)

| 話者 | 「主人公」の表現形式 |
|----------|--|
| C01・Nar1 | 小人儿 (小人) |
| C01・Nar2 | 小人儿 (小人) |
| C03・Nar1 | 小人儿 (小人) |
| C03・Nar2 | 小孩儿 (子ども) |
| C05・Nar1 | 阿毛 (毛くん) |
| C05・Nar2 | 小人物 (小さい人物) |
| C07・Nar1 | 简笔画画画的 <u>小人儿</u> (簡単なタッチで描いた小人) |
| C07・Nar2 | 人 (人) |
| C09・Nar1 | 小孩儿 (子ども) |
| C09・Nar2 | 很可爱的, 像土豆一样的 <u>小球</u> (可愛い、じゃがいものような <u>小さい球</u>) |
| C11・Nar1 | 人 (人) |
| C11・Nar2 | 人 (人) |

ストーリーに登場する人でも物でもない、丸い形をした主人公の描写に関して、JNS は主人公に言及した10名中2名が、それを断定的に表現せず、

「～のような」「～みたいの」という形式を用いて、聞き手に伝えている。一方、CNSは描写が難しい主人公に関して、12名中1名が「像土豆一样的（じゃがいものような）」と不確実性の表現を用いて表現している。ここでは、両者の違いはそれほど顕著ではないと言える。

次に、「棒」についての表現を比較する。「棒」は主人公が崖を飛び越えようとして使用しているものである。

表9 棒の表現形式 (JNS)

| 話者 | 「棒」の表現形式 |
|----------|--------------------|
| J01・Nar1 | 棒切れ <u>というか</u> 、棒 |
| J01・Nar2 | 棒 |
| J03・Nar1 | 棒切れ <u>のようなもの</u> |
| J03・Nar2 | 棒 |
| J05・Nar1 | 棒 |
| J05・Nar2 | 棒 |
| J07・Nar1 | 棒 |
| J07・Nar2 | 棒 |
| J09・Nar1 | 棒 |
| J09・Nar2 | 木の棒 |
| J11・Nar1 | 木の枝 |
| J11・Nar2 | 棒 |

表10 棒の表現形式 (CNS)

| 話者 | 「棒」の表現形式 |
|----------|----------|
| C01・Nar1 | 木棍儿（木の棒） |
| C01・Nar2 | 木棍（木の棒） |
| C03・Nar1 | 木棍儿（木の棒） |
| C03・Nar2 | 棍子（棒） |
| C05・Nar1 | 木棍（木の棒） |
| C05・Nar2 | 杆子（棒） |
| C07・Nar1 | 杆儿（棒） |
| C07・Nar2 | 木棍（木の棒） |
| C09・Nar1 | 棍（棒） |
| C09・Nar2 | 棍子（棒） |
| C11・Nar1 | 杆子（棒） |
| C11・Nar2 | 棍子（棒） |

「棒」に関しては、JNS12名のうち2名が不確実性の表現を用いている。それに対して、CNSは12名全員が断定的に表現している。

最後に、場所としてストーリーに登場する「崖」について比較する。「崖」は、主人公が棒を使用して飛び越えようと試みているものである。

表11 崖の表現形式 (JNS)

| 話者 | 「棒」の表現形式 |
|----------|-------------------|
| J01・Nar1 | 崖の <u>ような</u> ところ |
| J01・Nar2 | 谷間 <u>みたいの</u> |

表12 崖の表現形式 (CNS)

| 話者 | 「棒」の表現形式 |
|----------|----------|
| C01・Nar1 | 悬崖（崖） |
| C01・Nar2 | 悬崖（崖） |

| | |
|----------|---------|
| J03・Nar1 | 崖のようなもの |
| J03・Nar2 | 崖 |
| J05・Nar1 | 崖っぶち |
| J05・Nar2 | 崖 |
| J07・Nar1 | 崖 |
| J07・Nar2 | 崖 |
| J09・Nar1 | 崖っぶち |
| J09・Nar2 | 崖 |
| J11・Nar1 | 崖 |
| J11・Nar2 | 崖 |

| | |
|----------|---------|
| C03・Nar1 | 悬崖（崖） |
| C03・Nar2 | 悬崖（崖） |
| C05・Nar1 | 悬崖（崖） |
| C05・Nar2 | 悬崖（崖） |
| C07・Nar1 | 断崖（断崖） |
| C07・Nar2 | 悬崖（崖） |
| C09・Nar1 | 沟峯（丘陵） |
| C09・Nar2 | 悬崖（崖） |
| C11・Nar1 | 悬崖（崖） |
| C11・Nar2 | 山崖（山の崖） |

「崖」については、JNS は3名が不確実性の表現を使用して表現しているのに対し、CNS は全員が断定的に表現している。

以上、ここではJNSとCNSが「主人公」「棒」「崖」をどのように表現しているのかについて見てきた。全体として、JNSは十分に特定できないものを表現する際、不確実性の表現を付加しながら断定を避けて表現する傾向があり、CNSは、登場する人物・事物を断定的に表現する傾向があるということが明らかになった。

この結果を踏まえて、JNSとCJLの比較で得られた結果を解釈してみる。前節では、解釈が自明のもの（「父親」「子ども」）、数多くの解釈が生まれ得るもの（「絵に描かれた動物1」）を両極として、その中間的な登場事物（「絵に描かれた動物2」「鞭」）に関しては、CJLに比べ、JNSのほうが不確実性の表現を多く用いて表現する傾向があったとした。本節の結果では、JNSには3つの人物・事物すべてにおいて不確実性の表現を使用する者が存在したのに対し、CNSには「主人公」に1件用いられたのみであった。

これは、CNSは母語の語りでは不確実性の表現をほとんど用いないが、日本語能力が高くなると、語りにおける不確実性の表現使用という行為を習得し、特に数多くの解釈が生まれ得るものについては、不確実性の表現をJNSと同程度に使うようになったものと考えられる。

5. おわりに

本稿では、絵に描かれているストーリーに登場する人物・事物 X を描写する際の表現の選択に焦点を当て、日本語母語話者と中国人日本語学学習者の語りを分析した。また、その結果を踏まえ、日本語母語話者と中国語母語話者の語りを比較し、母語の語り方の影響についても分析を加えた。

これまでの研究で、日本語学習者の語りへの母語の語り方の影響を指摘したものに、視点や接続表現を扱った渡邊 (1996)、視点を扱った奥川 (2014) などがあるが、それと比べると本稿で取り上げた名詞とそれに伴わる不確実性の表現は、より随意的であり、言語構造の違いに加え、語りという行為への聞き手の期待や話し手の向き合い方の領域に関する現象であると思われる。このような要素の洗い出しは、言語間のレトリック対照研究としても興味深いものではないだろうか。

今回は、名詞を中心とした分析であったが、今後は、動詞を中心とした他の実質語にも範囲を広げて、分析を進めたい。

注

- 1 ここでの「語り」は、渡辺 (2007) による「ストーリーを語る談話・文章」の定義に従い、「過去の経験を時間的・空間的連続体として、その流れに沿って再現するために実現された話しことばおよび書きことばによることばのまとまり」と定義する。
- 2 「不確実性」については、岡野 (2017) が、「不確実性」「共通性」という2つの概念を用いて、従来「推量」「比喩」といった話者の行動の観点から捉えられていた「ように」の用法を整理している。「ように」(あるいは「ようだ」) が「不確実性」という性質を持っていることは、筆者も同意するが、本稿では、より広い範囲の形式に適用できる概念として「不確実性」を用いている。

付記

本研究は、国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学学習者のコミュニケーションの多角的解明」の成果である。また、本稿は、

「第8回日本語／日本語教育研究会」（2016年10月開催）におけるポスター発表「語りの談話に出現する名詞における不確実性」の内容について、新たなデータと分析を加え、大幅に加筆・修正したものである。

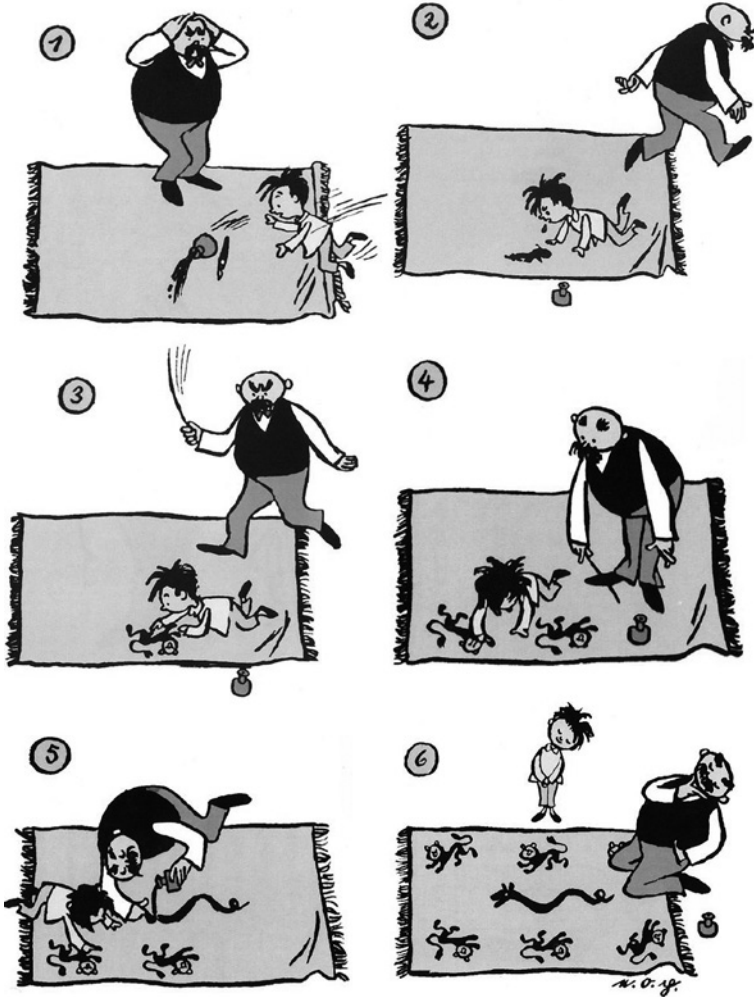
参考文献

- 烏日哲（2010）「中国人日本語学習者と日本語語母語話者の語りにおける説明と描写について—「絵本との一致度」の観点から」『日本語教育』145, pp.1-11. 日本語教育学会
- （2011）「中国語を母語とする日本語学習者の「語り」の冒頭部」と終結部における表現的特徴—日本語母語話者と比較して—」『一橋大学留学生センター紀要』14, pp.23-35. 一橋大学留学生センター
- （2012）「中国語を母語とする上級日本語学習者の語りにおける名詞の使用について—日本語母語話者と比較して—」『日本語／日本語教育研究』3, pp.161-172. ココ出版
- 岡野ひさの（2017）「「共通性」と「不確実性」からみる「ように」の全容—「ようだ」における事実と認識の関係をもとに—」『福岡大学研究部論集A人文科学編』17（4）, pp.51-57. 福岡大学
- 小川悠紀子（2017）「上級日本語学習者の談話における「は」と「が」の知識の運用—未出か既出かによる使い分けに着目して—」『日本語教育』166, pp.77-92. 日本語教育学会
- 庄司恵雄（2001）「日本語学習者のストーリー・テリングは語彙選択から見て日本語母語話者とどこが違うか」『群馬大学留学生センター論集』1, pp.1-11. 群馬大学留学生センター
- 砂川有里子（2017）「ストーリーテリングにおける順接表現の談話展開機能」『時間の流れと文章の組み立て—林言語学の再解釈』ひつじ書房
- 渡邊亜子（1996）『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版
- 渡辺文生（2007）『日本語母語話者と非母語話者の語りの談話における「話段」についての研究』（平成16～18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）
- 奥川育子（2014）〈关于日语母语者和以英语为母语的日语学习者在语篇叙事中的视点研究〉《>语言学研究》16, pp.57-67. 北京大学外国语学院外国語语言学及应用语言学研究所

(たわらやま ゆうじ・准教授)

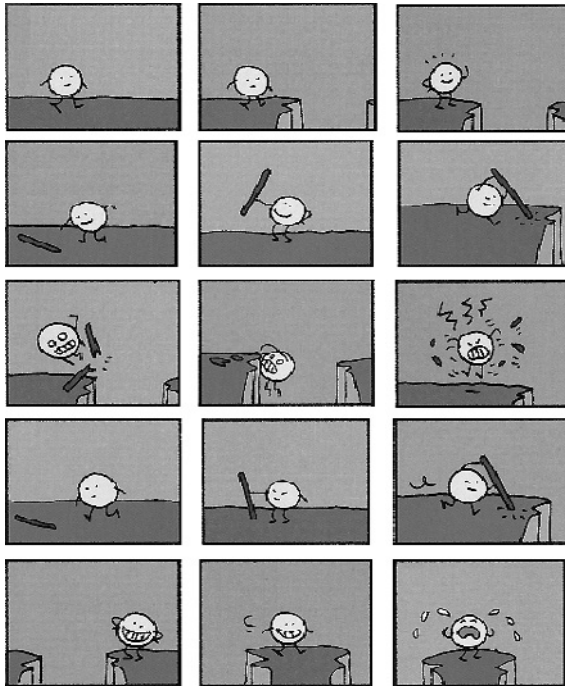
(もちづき ゆうすけ・名古屋大学大学院博士後期課程)

稿末資料 1



E.O.Plauen. *Vater und Sohn* (father and son), Berliner Illustrierte Zeitung, 1934-1937

稿末資料 2



※ミスター・オー・コーパスについて

ミスター・オー・コーパスは、科学研究費基盤研究(B)の以下の援助を受けて収集された談話データである。

•「日本語データ」

「アジアの文化・インターアクション・言語の相互関係に関する実証的・理論的研究」（平成15～17年度, No. 15320054, 研究代表者 井出祥子）

•「中国語データ」

「『場』の語用論モデルの構築：母語話者視点による通言語的実態分析に基づいて」（平成26～27年度, No. 15H03208, 研究代表者 藤井洋子）